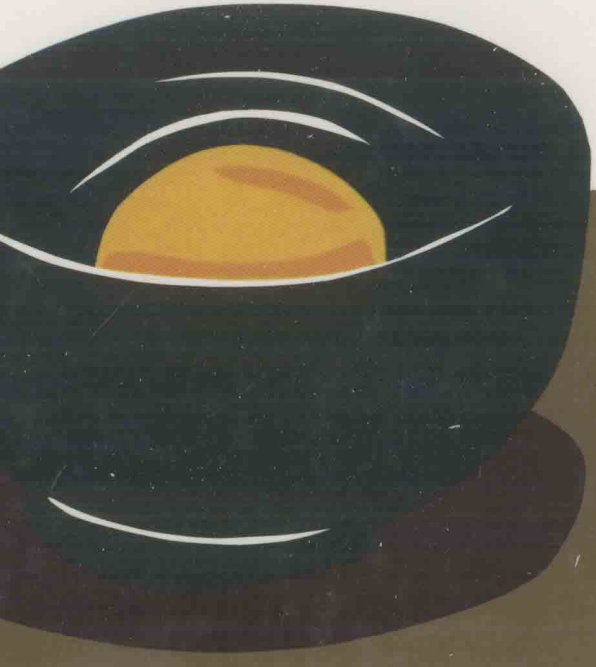
暢気眼鏡・まぼろしの記

尾崎一雄



暢気眼鏡・まぼろしの記

尾崎一雄

市古貞次・小田切進＝編　日本の文学61

暢気眼鏡・まぼろしの記

著　者　尾崎一雄
責任編集　市古貞次（古典編）
　　小田切進（近代編）
発行日　昭和六十年二月一日　初版第一刷発行
発行所　株式会社　ほるぷ出版
　　代表　中森蒔人
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五四―七〇三一（代）
総発売元　株式会社　ほるぷ
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五六―六二一一（代）
製　作　東京連合印刷株式会社
　　印刷　大日本法令印刷株式会社
　　函・表紙印刷　共同印刷株式会社

目次

暢気眼鏡　1
父祖の地　41
玄関風呂　67
虫のいろいろ　83
なめくじ横丁　111
まぼろしの記　223
注　364
尾崎一雄を読む
——日本人の自然観と生活感覚のエッセンス　坂上弘　373

暢気眼鏡

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

「ちょっとオ」とか「これよ、これ」とか云う芳枝の声を、「うるさいな」と思い思い私ははっきりせぬ夢から抜け切れずにいた。が、直ぐ覚めた。朝だ。芳枝が、薄眼で呆然している私の鼻先に何か光るものを突きつけて、

「これ」

「何だ」見ると金色の妙な恰好したものだが、私には何か判断がつかなかった。

「これ、一寸壊れてるし、あると歯が痛いから除っちゃった」

入歯の金冠だなと思うと、私は全く眼が覚めむっくり起き上ろうとしたが、

止めた。ちらと芳枝の顔を見やり、夜具を鼻の辺まで引き上げ、又眼を閉じて了った。私には一寸何も云えなかった。「態を見ろ」と何かに云われていると感じ、「判ったよ」と反撥的に頭の中であたりを見廻すのだった。するといろいろの顔が浮ぶ。「死ね」と泣き乍ら云った母。「元の兄さんに返って下さい」と手紙を寄越した妹――すでに四年も見ない顔だ。一月程前、雑司ヶ谷にいる芳枝の姉に、自分達のことを事後承諾させに行った時、「承知不承知なぞとわたくしにはもう――。ただ、あれは一人の妹ですから、先先人並の生活だけはさせてやって頂きとう存じます」と云われた、その姉の教師らしくないやさし気な眼付き――「もういい、もういい」と苦笑いするのを追いかけて「俺も居るぜ」と顔を出したのは友人のSだ。一週間程前、金借りに行ったが度度のことで断わられ、私がふくれ面しているとSが改まった顔付になり、「君はどうしても僕とこから持って行くつもりかね」とゆっくり云った。私は全然居直っ

た形でSを見返すと、「為方がないんだ」とふてぶてしい声を出した。Sは、蒼い顔で暫く黙っていたが、「じゃあ、為方がない」と云うなり立ち上ると押入をガタンと開け、行李の中から和本二三冊取り出して私の前に置いた。

「足りまいが、これをどうにでもして貰おう」

手にすると、*国芳あたりの春画本だ。私はそれを膝の前に置き、暫く考え込んだ。やがて割に平気な顔で「有難う」と云った。が云って了うと、不意に激しい感情に襲われた。図太い張りが消し飛んで了ったのだ。

「僕は、どんなに恥を掻いても、今、為方がないんだ。絶対に今金が無くてはいけないのだ。出来れば泥棒でもする。君に云ったところが判りっこはない、君がそっくり今の僕になって見ない以上は。だから、腹でどんなに罵倒されていようと僕は関やしない。その覚悟は初めからしているんだが――」云っていると、眼前のSを忘れ、自分だけの感情から意気地ない泪を浮べて了った。S

が其の時どう云う顔したかは覚えぬ。後で碁を打ち、双方気持を取り戻して別れたのだが……。

芳枝が、

「これエ、要らないんだけど――どうする？」

「どうするったって――」と向き直ったが、此の場合怒った風をする外ないと思われ、

「なぜ君はそんな莫迦なことをするんだ。その歯、そんなにして、当分治せるあてはないじゃないか」怖い顔をして見せた。芳枝は気押された様子だったが、まだ私の気持をうかがう風は捨てず、独言のよう、

「これ自分で売りに行って、ドラ焼買おう」と云った。私は返事をせず、尚もみじめな自分の気持を小突き廻していた。昨日の夕刊に、或時計店の広告ビラが折り込まれていて、金大暴騰、一匁に付純金いくら十八金いくら、今が売り

時、とあった、それを見ての思い付きに違いない。自分の喜ぶことを予定している様子なのが気にくわなかった。或はそれはも一つ屈折して、自分の気持を軽く運ばせようとした芳枝の心遣いかも知れぬ。それなら更に不愉快だと思った。二十やそこらの子供にいたわられては堪らぬ。やはり持前の単純暢気さから、金無くてむっとしている自分を喜ばせる気でやった事だろう。この方なら気に喰わぬ乍らも、此の場合負わされる所まだ多少軽くて済む。――然し可哀そうな奴だ、と主我的な気持に余裕が出て来た。そう思うと、気持はずっと芳枝の方に流れ、私はまた違った意味で弱り切った。顔付を柔らげて、

「無い方がいいんなら除っちまってもいいけど、あとどうかな。だけどもう片方のやつはこわれてないんだから、また俺の寝てる間に除ったりしちゃ駄目だぜ、今度は本当に怒るよ、いいか」

「うん」と急に嬉しそうな芳枝の顔を残し、も少し寝ると夜具を頭からかぶっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

午近く行きつけの質屋へ出かけ、金冠を見せると十八金七分と云うことで、四円いくらかになった。溜っている利息に呉れと云うのを持ち帰って第一に米を買った。嘗て聞いた、貧乏し切って何も彼もなくなり、金歯を入質して米を買ったが、それを喰う段になり弱ったという笑話が苦苦しく憶い出された。

二

芳枝と知り合う前のことを簡単に書く。

三年程一緒にいた妻Eと、私に収入のないことから不和になり、加えて郷里の母との間の鬱積した関係が極度に達した時、何も彼もが面倒になって私は不意にN市へ走った。N市には私の尊敬する芸術家が居るのだ。N市へ行ってその人の顔を見、声を聞いたら切れそうな呼吸も落ち付こう、ただそれだけの望

みしかなかった。Eは行く先を知って居たが、郷里では知らず、のち使の者がEの所へ来て判った。母はあきらめ、一つには行き先が先故多少私の気持も考えたらしく、後追うのを止めた。云い忘れたが、私は父が早死した家の長男で、老いた母と三人の弟妹を世話しなければならぬ身の上なのだ。家計のやり方に就て母から不服を云われ、言われて見て自分も悪い点を認めたが、母がそれのみ責めたことから私はつむじを曲げた。そして現実に家の経済は破局に近付き、それを捨て置いてのN行だった。

N市に居着いて、気持では郷里のことから可なり離れることが出来た。行く処まで行ったからだ。が、妻に関してはまだ処理し切れなかった。N行に際し、私はKと云う友人に「あとを万事お願いする」と云い置いたのである。それを云う時、卑怯かな、と多少思った。が、止むを得ないのだとも思えた。Kは私にもEにも古い友だが、一時互の居所の距りから行き来間遠の頃があった。そ

の間に私とEとの間はひどい不和になっていた。Eが以前やっていた商売をまた始めると云い出し、私も賛成して市内の旧居に帰ってからは、Kもよく来て世話を焼いて呉れたが、第一に私とEとの不和に驚き心配して呉れた。粗暴な私は、すでにその頃口で云うことを止め、Eをよく殴った。或時はEの左鼓膜の破れたのに気づかず、翌朝鏡に向って、かわいた血に驚いたことがあった。KはEに同情した。それが段々と育って行き、Eもそれを感じ始めたと知ってから、私は余りEを殴らなくなった。そして、私とEとの間は冷え切って了ったのだ。

N行の支度のことでEと気まずい口をきき合った時、私は顔は真面目に、冗談らしい調子で、

「俺が行って了えば勝手にしていられるんじゃないか、まアふくれるな。俺は鉾をおさめるぜ」と声だけで笑った。

「何おっしゃるの」Eは云ったが、私は云う顔付を見ようともしなかった。Kにはああ云ったし、これで片づこう、そう思った。

N市の、現実に妻の顔見ぬ生活では、Eに対して巻き切ったと見えた私の気持にも、予想通り多少のゆるみが来た。Eを哀れな女と思えた。が、二三ヶ月して私の動揺も静まった。八ヶ月目に帰京し、直ぐ妻との間を決算した。EはKの妻になり、郊外に家を持った。

三

一人になって一年後、昨年の夏、K市から始めて東京に出て来た芳枝と知り合い、一ヶ月のつき合いの後、事実上の結婚をした。

私に母や弟妹を捨てさせ、妻を去らしめたのは直接には金の問題だが、根本は私が小説を好くことにある。私としては普通の世渡りの成り難い程元来偉く

も莫迦でもないと密かに思っているのだが、いつか小説好くことの深みに陥り、父の遺産が無くなって気附いた時は遅かったのだ。世を渡る術の足場は全で失い、余裕あるころその方向への心構えは捨てて顧みなかった故、あらゆる意味の空手で、追われても走る気力のない野良犬、先ずそんなものだ。一人になった時、それでいいと思った。もとよりなかなか気に入ったものが書けるとは思わず、書けてもそれで世間並にやって行く望のないことは前からの覚悟故、自分一人で困っていれば済むと気楽だった。再び結婚はすまい、腐れ縁の古女房が居るのだと小説のことを考え、事実N行以来書けそうに思えて来たのであった。

芳枝に好意を持ち、芳枝の肚も判った時、私は当然躊躇した。然し、それを飛び越えて了った。芳枝のすなおに示す感情の美しさに挫がれたのだ。が、一方、また此の女を苛めるのかと自分を咎めぬわけにゆかなかった。その気持は、

芳枝が若く、何も知らぬ暢気な娘と思えた故、強く来た。

四

居る所は汚い下宿の六畳で、机、本棚、空箱笥を並べ、コンロを廊下の隅に置いて自炊生活だ。宿主は、為事が片付けば纏めて払うからとの私の言を信じ切れぬらしく、食事持って来ることを断わったのだ。宿には相当額の宿料が溜っていた。自分は今、何もせずにいるのではないから少しは余裕を見せ、落ち付いて為事をさせて呉れぬものかと、多少腹が立った。いくらでもと入金をせめ立て、食事を止めて其日の米を得るためにあちこちと駈け廻らせるのでは、結局為事は遅れて互の損ではないか、そう云ってみても、「うちも困っていますから」と相手にしない。いらだちと奔走とで、事実なかなか為事は捗らなかった。その為事は或全集物の一部で、遅れる程損であることはよく判っていた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com